

近藤昊先生の思い出

芝浦工業大学 新海 正

近藤先生が亡くなられたという連絡を知り合いから受けたのは、2ヶ月ほど前のことでした。あまりにも突然のことで、絶句してしまったことを覚えています。

わたくしと近藤先生との出会いは、東京都板橋区にあった東京都老人総合研究所生物学部と一緒に老化研究を始めた時、およそ三十数年までさかのぼります。当時は先生もアラフォー世代で、公私ともに非常に快活に色々なことに挑戦されていたように思います。研究面においては、老人研だけではなく他の研究機関とも積極的にコンタクトを取り、いくつかのすばらしい業績をあげていました。また、それが評価され、米国の老化研究所に短期留学されたのもその時期であり、そのチャンスを



ハンガリー・ブタベストにて

生かして、海外にも多くの友人を作られたようです。先生が帰国された時に、あなたも日本ばかりではなく外国にも出かけて様々な角度から自分を観てみると良いと言われたことを記憶しています。実際、数年後にはわたくし自身、近藤先生が歩いてきた道を同じようにたどったのですが。

先生のことを頑固者だという人は多いでしょう。特に、ご専門の「細胞老化」においては、国内・国外を問わず、学会や研究会議の場で他の研究者に対してご自分の考えを主張しながら、整然と議論をしていた光景がよみがえってきます。わたくしも先生の最後の仕事に参加しましたが、研究をまとめる段階になると、なかなかわたくしの意見が取り入れて



都内・某所にて

もらえなかった事を覚えています。しかし、後から冷静に考えると、そういうこともいえるかなと思ったりもしました。

近藤先生は自然と歴史・文化が大好きでした。機会を見つけては、あるいは作っては、様々なところを訪ねていたように思います。わたくしもご一緒させていただいたことが多々あります。先生は学生時代にワンダーフォーゲル部に所属して、日本全国の山々を踏破されたということを伺ったことがあります。その影響からか、地方の学会の時はその近くの山に登ったり、それに関連した神社や仏閣を訪ねることを楽しみにしていました。たぶん、全国ほとんどの都道府県に足を踏み入れている



富山県・立山にて

のではないのでしょうか。海外でも同様に国際老年学会等の国際会議を利用して、老化研究をおこなっている大学や研究所を訪問し、研究交流をするとともに、その都市やその近郊を散策して、土地の雰囲気を満喫しているようでした。

昨年（平成 26 年）5 月に人間総合科学大学を退職したとののがきを受け取りました。その中には今後は少しのんびり人生を楽しみたいと思っているということが書かれていました。それから半年間、少し時間が足りないようにも思われますが、のんびりと過ごすことができたのでしょうか。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。合掌